



Vol. 50

CONTENTS

【コラム】「その後」のTENTOとプログラミングスクールの現在… 竹林 暁

【解説】情報教育と統計教育 No.2 手順的な自動処理と機械可読データ… 奥村 晴彦

COLUMN

「その後」のTENTOと
プログラミングスクールの現在

TENTOは2011年4月に設立された小・中学生向けのICT／プログラミングスクールである。子どもに習いごととしてプログラミングを教える団体としては「日本初」を標榜している。2013年9月号のぺた語義¹⁾で設立の経緯や活動について紹介した。あれから約2年が経過し、今回は民間における子ども向けプログラミングスクールの現状とTENTOの「その後」についてレポートさせていただきたい。

2014年ごろから日本でも子どものプログラミング教育への関心はずいぶん高まってきたように思う。メディアに取り上げられることも増え、関連書籍も複数出版されるようになってきた。この流れに乗って、子ども向けプログラミングスクールも増えつつある。首都圏では20を超える事業者数になっている。TENTOのように専業でスクールを運営しているところは少ない。他の事業（ソフトウェア開発、人材紹介業など）を営みながらのケースが多いようだ。スクールの範疇には入らないかもしれないが、無料で子どもにプログラミング学習の場を提供する機関も目立っている。ただ、どのスクールも遠方から電車で通う子どもが多い。身近にはないという点でプログラミングが「特殊な」習いごとにとどまってしまう。また、男子に比べて女子がきわめて少ないのも自然とは言いがたい。今後は、どこに住んでいても近所のスクールに通えるような場所的な広がりとともに、どんな子どもでも学べるような内容面での拡充が期待される。

TENTOも、子どもたちがプログラミングに触れる機会を増やすことを目的の1つとしている。現在は、従来の東京都新宿区と埼玉県さいたま市に加え、神奈川、千葉など計5カ所で開講している。また、2014年末から新たにフランチャイズ教室をTENTO EX. という名前で開始した。東京都文京区など3カ所に広げている。

教室数を増やすとともに、子どもたちが学習できる内容も増やしてきた。ViscuitやScratchなどのビジュアル言語、JavaScript、Pythonなどのテキスト言語に加え、Arduino、Raspberry Piを使ったハードウェア製作、Minecraftなどの教育ゲームも取り入れた。入り口を増やしてさまざまな志向を持った子どもにプログラミングを楽しんでもらうためである。

TENTOの子どもたちは90分の講座に週1回参加する。土曜日も開催しているが平日夜からの講座が中心である。講座の進め方についてはずいぶん試行錯誤してきたが、現在は寺子屋方式と講義形式の中間に落ち着いている。年齢やスキルが異なる子どもたちが同じクラスに参加し、講義を聞くか、自分の課題をこなすかを自由に選択してもらう。多様な子どもが集まることでコミュニケーションが創発される狙いもあるが、このように多様でリラックスした雰囲気の中でこそ創造性が磨かれると思っている。

規模は拡大しても、子どもたちの創造性を重視し「楽しみながら学ぶ」という基本姿勢はまったく変わっていない。プログラミングが子どもたちにとってごく普通の習い事になることを願ってTENTOは日々活動している。

参考文献

1) 草野真一：プログラミングスクールTENTOの冒険，情報処理，Vol.54, No.9, pp.948-951 (Sep. 2013).

竹林 暁((株)TENTO)